

飼育レポート

ココを見て!

動物の展示について

飼育展示担当主席主査 宇佐美 均



感も体感できます。直ぐ目の前にいるカンガルーと同じ目線、同じ空間を是非感じてみてください。

アフリカタテガミヤマアラシには、「びっくり出窓」と題したガラスの部屋を作りました。体の特徴である「トゲ」の迫力を1枚のガラス越しに観察できます。

今回紹介した構造物の工夫の他にも、動物の食事風景を魅力的に解説し演出する「まんまタイム」や餌やり体験など至る所で様々な工夫やサービスがあります。今後も動物の魅力やすばらしさを身近で見て、感じてもらえるような工夫をどんどん展開していきます。

大森山動物園では、お客さまに動物の魅力をもっと存分に感じてもらうため、様々な展示工夫を行っています。動物との距離を縮め、より間近で観察できる工夫や体の特徴、生態が際立つ工夫など様々です。その中のいくつかを紹介しましょう。

ツキノワグマでは、野生での食事風景を再現しようと、展示場に高さ約2mの丸太の餌台を設置しました。数カ所に10cm程の穴をあけ、その小さな穴から餌を採って食べる様子を観察いただけます。穴を広げようと鋭い牙でかじったり、爪先や舌先を器用に使ったりと、地面に広げた餌を食べるのとは違って、器用にしかも知的なツキノワグマの一面を見る事ができます。

また、マーコールでは、牛の仲間であるにもかかわらず、険しい岩山を簡単に登り下りできる、しなやかな身体能力を引き立たせるため、足場の悪い「お食事どころ」をフェンス1枚隔てたお客さまの直前に設けました。直径10cm程の細い円柱に、餌となる桑の枝葉を差しこむと、我先に寄って来ては前肢を円柱にもたれ、上手にバランスをとりながら食べる様子が観察できます。食事風景の他、足先や腹部など体の特徴もすぐ目の前で見る事ができ、新たな魅力発見となることでしょう。

カンガルーの展示場には、「カンガルーの丘」と題した動物と一つの空間を体験出来る場所を設けました。高さわずか30cmほどの生け垣があるだけで、他には何も遮る物はありません。その生け垣を時々飛び越えてくることもあり、ドキドキ

フラミンゴ 18年ぶりの復活

飼育展示担当 櫻庭美千代



が灰色で正羽も少しずつ伸びてきました。いつからピンク色に変わるのか、フラミンゴを担当して初繁殖の私自身も気になります。今年はこの他にも7個の産卵があり、フラミンゴ繁殖も軌道に乗つつあります。まだまだ問題は多いですが来年はさらに進歩できるように頑張りたいと思います。

昨年2個の産卵があったものの、悔しくもヘビに被害され繁殖は失敗でした。今年は少しでも卵を守るために、産卵後、擬卵と交換し孵化する約30日のうち20日ほど孵卵器を使っていたの孵化作戦を展開しました。

卵は孵化する1週間前には親元へ戻し、卵を親元へ戻してから孵化後半月は展示場のヘビ対策を強化しました。ヘビは臭いに敏感なので、展示場一帯にトイレボールの設置と忌避剤の散布等できる限りの対策を施しました。

産卵から28日目、7/19にヨーロッパフラミンゴ1羽がついに孵化しました。18年ぶりの繁殖です。2羽の親は上手にミルクを与え、ヒナは孵化後5日目には巣立ち、最近では大人と同じ餌を食べ、たまにミルクをもらっています。ヒナは全身

「さるっこの森」壁画制作について

飼育展示担当 奥山麻裕子

大森山動物園で飼育展示担当として働き始めてからこれまで、動物解説の看板の他に記念撮影用の顔出しパネルなど、色々な動物・大きさの看板を制作しました。今回は、今年の夏に制作した「さるっこの森」の壁画についてお話ししたいと思います。

さるっこの森の壁画は、さるっこの森で展示されているコモンマーモセット・ボリビアリスザル・ノドジロオマキザルの3種類のサルをペンキで描いたものです。壁画自体のサイズはタテ1.8m、ヨコが2.7mという大きさです。

制作中は、ペンキや板を用意してもらったり、暑い中の制作だったので、作業スペースに扇風機を設置してもらったりと、色々な人に協力してもらいました。

看板にできるだけ写真よりも絵を多く使うようにしているのは、写真よりも絵の方が温かみがあり、お子さんでも親しみやすいと思ったからです。また、展示場で少し見えにくかったり暗い場所において全身がはっきり見えなかったりした動物が



いた場合でも、絵を見て身体の作りや色などの細かいところがわかるように、動物のイラストはできるだけ実際の動物に近づけて描くように心がけています。

飾られた動物絵から、動物の特徴や野生動物の迫力などを来園者の皆さまに伝えられたら嬉しいです。

動物病院から

ウィッキーの闘病記録

獣医師 高橋 拓

大森山動物園の人気動物である雄のアムールトラのウィッキーが今年6月に死亡しました。2009年冬から体調を崩し、病状は良くなったり悪くなったりを繰り返していました。良いときは食欲旺盛で歩行も正常でしたが、悪いときは一切餌を口にせず、室内で動こうとしませんでした。やっと起き上がって歩こうとしても、背中丸まり、右後ろ足に力が入らない様子でした。腰の痛みが足にきているという感じがしました。すぐ調子が悪いときは吹き矢で痛み止めを注射しました。だいたい午前中に注射すると、何事もなく夕方には餌をねだるように待って立っていることが多くありました。病状がさらに悪化したのは2011年3月頃からです。朝から横になって動こうとせず、外の展示場にも出られなくなりました。そして後ろ足の筋肉はみるみる細くなりました。飼育担当者として私たちは、ウィッキーに声をかけ何とか立たせて歩かせようと色々試しました。また元気な姿でみんなの前に堂々たる勇姿を見せてやりたいという思いを込めて。何故なら大型の野生動物は立てなくなったら死あるのみだからで



す。しかし2011年6月、ほとんど一日中寝ていることが多くなり、寝返りが出来ず、床ずれも起こるようになっていきました。そのため足に負担がかからないようにゴムマットを敷いたり、床ずれを消毒したりいくらかでも悪化しないように努力しましたが、6月16日の朝静かに死んでいきました。今回ウィッキーへの治療は対症療法という選択をしました。果たしてそれが最良の判断だったか、最良の治療であったかどうか自問しています。ただ何かしてあげたいという思いで選択し、取った行動は動物園スタッフ全員の思いでした。

この悲しみは消えません。しかし、いい知らせもあります。なんとウィッキーの孫が生まれたことです。そしてその孫が大森山動物園に帰ってくるという知らせです。ウィッキーの堂々たる勇姿を受け継ぐ若い命を今から楽しみにしています。